問題2B－1　次の文章を読んで、後の問にこたえなさい。（30点）

※1バッハは難しい、演奏することも指導することも。

それはどこかの高名なバッハ弾きやバッハの研究家がそう言っているからではなく、多くの関係者が実際に感じていることではないだろうか。そう思っているからこそ、自己研鑽や指導研究にみな力を入れているのである。

これは随分昔、生徒ゴブダイ君とのレッスンでのことだ。人並み程度には弾けて、テクニックの本も教本もそれなりに順調に進んできていたゴブダイ君も、バッハの教本※2インヴェンションに入ってからは苦戦していた。一曲につき二ヶ月かかることは珍しくなく、一年間に仕上げるのは五・六曲が精一杯。しかもその仕上がりはあまり良いものとは言えない。数年かかったのちに次の※3シンフォニアになんとか辿りついたが、進行スピードはさらにA ドンカして三ヶ月以上に一曲がやっとのペース。中学生になってから ドビュッシーやショパン、ベートーヴェンなどの中級程度の曲をそれなりに仕上げられる彼にとって、バッハは明らかに苦手ジャンルとなっていた。

ゴブダイ君を他の先生から引きづいて指導するようになってしばらくした頃、おそらくバッハのような※4ポリフォニーの音楽が苦手になるのではないかと予想はしていた。初級から初中級くらいの教本は順調という進み具合だったし、言われたことはしっかりと練習してくるものの、彼の演奏はどこか表面をなぞっているような感じであり、音楽というよりも音を並べている感じがどうしてもしてしまう。

もちろん、それは指導のやり方次第という部分も大きいので、歌心が演奏に出るように一緒に歌ったり横で弾いて刺激を与えると当時に、ポリフォニーの初歩・初級教本を彼に与えたりワークブックでB ガクテンの知識を身につけさせてたりして、それを※5アナリーゼに活かすというようなことも継続をした。できれば感性を伸ばしつつも、論理的な捉え方もできるようになってくれれば・・・。

だが、それがインヴェンションを弾く時に大きく実を結ぶような感じはしなかった。ペツォルトのメヌエットやバッハ小プレリュードの難易度が低めの曲ならなんとかなったが、その先のインヴェンションは彼の前に大きな壁のように立ちはだかっている。この事態は頭脳明晰で音楽的センスもあると自負している彼にはきっともどかしさがあったことだろう。

僕は彼の苦手意識を刺激することはせずにバッハの曲のレッスン中は改善点を淡々と指摘する。他の曲のレッスンでは、良い部分は大いに褒めて改善点を少しだけ指摘する。数年間一緒にやってきて、彼が結構なアプライドを持っている性格だということはわかっている。そして、そのプライドをズタズタと崩すようなことはしない方が良いと思うのだ。それがいずれバッハの練習にも良い方向として現れることを期待して。

でもそんな簡単に物事は進まない。ゴブダイ君の弾くシンフォニア一番は形にすらならないで早二ヶ月。要するに苦手だから練習しない。しないから進まないというC 悪ジュンカン。これはさすがに何か言うタイミングだろうと思い、

イ「バッハって難しいよね。自分もあんまり得意じゃないしね」

と言ってみたところ、彼からは思いもしない言葉が飛び出した。

「やったー先生も子どもの頃、シンフォニア一曲に二ヶ月も三ヶ月もかかっていたんだ！」

あ・・・しまった。と思ったが時すでに遅そし。そういう意味で言ったのではない。僕はバッハを苦手にしている彼に対し共感を示し、一緒にシンフォニアを攻略して行こうと、後押しをするつもりで言ったつもりだったが、どうやら彼の誤解を招いたようだ。でも考えようによっては誤解をそのままにしておいた方が、現実をつきつけるようなことをしない方がいいようにも思っていた。

（本文は次のページへ続く）

そんなゴブダイ君から連絡があった。言われたカフェで待つこと数分。久しぶりに会った彼は見た目にもちゃんと気を使っていて、いかにも現代の大学生という感じだった。今は大学の教育学部四年生で来春からは中学校の理科の先生になることが決まっているとのこと。

しばらくは彼の大学生活についての話を聞いた。生徒に対しても保護者に対しても厳しい態度の先生になると熱心に語っていたが、現代のこの状況がそうさせてくれるだろうか。そこはもうすぐ卒業と言ってもまだ大学生なのだろう。

僕も最近の生徒のことを少し話した。以前に彼が発表会で弾いた曲を、今年の発表会では久しぶりに弾く人がいるとか、コンクールで賞を取れる子はそんなに多くないとか。

話していると、ふと彼が僕の買い物してきたバッグに目を向けて言った。

「それ、英語の本ですか。先生英語の勉強してるの？」

「ああこれは、自分の勉強でもあるけど、レッスンの話の流れから生徒の保護者に頼まれて大学受験の英語の勉強もやっているわけ」

そう答えて、僕は先ほど書店で買ったばかりの高校生英語の初級参考書を見せた。一時間以上も書店で検討した結果、あの高校二年生の生徒にはまずはここからだと思って選んだ本だ。

「大学受験参考書って懐かしいですね、まだ数年しか経ってないのに」

彼はパラパラと本をめくりながら言っていたので、僕はついでに聞いてみることにした。

「この初級レヴェルの参考書をちゃんとやり込んだとして、次の段階で何かおすすめはあるかな。数年前に受験生だった君としては」

彼から数秒の間があった後に出てきた返答は

「ああどんなのありますかね・・・英語の資格ものの問題集とかも使えるんじゃないですか」

というものだった。

そうだったね、君は。矜持（きょうじ）だけは高いタイプだから。だが僕にはその返答の様子で一瞬にしてわかってしまった。彼は大学受験の英語の勉強をほとんどしていないのだ。しなくても合格できるからではなく、苦手だからしない、していないから参考書についてもわからない。

だったら「英語は苦手で避けてたんで参考書わからないんですよ。数学と物理、化学とかならおすすめありますよ」と言えばいいのに。

その後も彼は熱心に大学での出来事などを語っていたが、僕は相槌を打ちつつコーヒーを飲みながらも別のことを考えていた。やっぱり彼が小・中学生の頃に、ちゃんと苦手に向き合うことも教えた方が良かったのかもしれない。自身の実力を認めることも大事なことだと言った方が良かったのかもしれない。もっと厳しくバッハを指導した方が彼のためだったのかもしれない。

この場で僕は何も言わなかった。言った方が少しでも彼のためになるかもしれないと思いながらも。

ウ今この時間は反省会。次へ活かすための反省会だと自分に言い聞かせていた。

（宇古水伊　舞「ぼくはバッハが得意じゃない」より）

※1　ヨハン・セバスティアン・バッハ　・・・一六八五年生まれのドイツの作曲家。音楽の父と評される。

※2　インヴェンション　・・・バッハが残した初中級教本。伴奏は無く左右の手がメロディーの音楽。

※3　シンフォニア　・・・インヴェンションの後に続く中級用の教本。インヴェンションと合わせて一冊となっている。

※4　ポリフォニー　・・・インヴェンションやシンフォニアのようなメロディーが複数の声部で演奏される音楽のこと。

※5　アナリーゼ　・・・楽譜を分析して楽曲構造をつかみ、演奏に活かそうとすること。

問1　傍線部　A　・　B　・　C　と同じ漢字を含む選択肢をそれぞれ一つ選びなさい。（各3点）

A　ドンカ

1　カセンシキのグラウンド
2　カガクセンイでできている。
3　市場はカセン状態だ。
4　カレイなプレーの守備
5　カソウツウカで投資する。

B　ガクテン

1　シチテンバットウの物語。
2　高速カイテンのスピン。
3　赤字をホテンする。
4　ブンキテンに立っている。
5　テンケイテキなパターン。

C　悪ジュンカン

1　カンキョウに配慮した工場。
2　カンゼンムケツなシステムの開発。
3　カンランシャに乗る。
4　カンサンキに旅行する。
5　カンシツ造りの仏像。

問2　傍線部　ア　プライドを持っている性格　と同じような意味で使われている文言を、本文中から十二字以内で抜き出しなさい。（5点）

（問題は次のページに続きます。）

問3　傍線部　イ　バッハって難しいよね。自分もあんまり得意じゃないしね　と僕が言ったのはなぜですか。最も適当な選択肢を選びなさい。（8点）

1　僕はバッハを演奏することは得意だが指導することが得意ではないので、ゴブダイ君がバッハをうまく弾けないことに責任を感じているから。

2　僕もかつてはゴブダイ君と同じようにバッハに苦戦する中学生だったので、彼がバッハを苦手とする気持ちにとても共感しているから。

3　僕も得意じゃないと伝えることによって、ゴブダイ君がバッハが進まない状況に同じ目線で考えていこうと努めてようとしているから。

4　僕はバッハを難しいとは本当は全く思っていないが、あまりに弾けないゴブダイ君に対してかける言葉が思いつかず、自分も不得意なフリをするしかないと思ったから。

5　僕もバッハはそれほど得意じゃないが、それを素直に伝えることによってゴブダイ君のやる気を引き出し、彼のプライドをより強固なものにできると思ったから。

問4　傍線部　ウ　今この時間は反省会　とありますが、僕の考えとして最も適切な選択肢を選びなさい。（8点）

1　ゴブダイ君が大学生になっても中学生の頃のようなプライドの塊の性格だと感じ、そんなことなら中学時代にもう少し厳しく言う方法もあったかもしれないと振り返っている。

2　ゴブダイ君の性格が以前とあまり変わっていない状況を残念に思いながらも、来春から中学校の先生に彼がなるという状況は、彼が良い方向へ変わる良い機会だと期待を抱いている。

3　ゴブダイ君の相変わらずの性格に対し、忠告をしてあげた方が良いとわかっていながらも、これまで彼と生徒と先生というしっかりとした関係を築いてこなかったことを苦々しく思っている。

4　周囲から厳しく指導されてきていないのに、来春からは中学教師として生徒や保護者に厳しい態度で接すると言い張るゴブダイ君に対し、短期間で退職代行を使うのではないかと危惧している。

5　ゴブダイ君がかつてと同じプライドの塊であることを知り残念だったが、それは自分にも原因の一端があるかもしれないと思い、現在の生徒の指導方法をもっと模索しようと思いを巡らせている。